

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース

発行
(財)第五福竜丸平和協会
〒136 東京都江東区
夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494

教育の仕事にかかわって早くも四〇年を過ぎた。学校教育において平和教育を考えるようになつたのは、確かにヒロシマにおいてすら、原爆の風化が進み始めた七〇年代に入つてからである。中学校に勤めていた私は、ヒロシマ修学旅行を計画し、八月には「戦争と平和を考える集い」を計画し、かなり活発に動いていた。

そして教科書裁判にかかわっていた私は、その支援運動のなかで、平和に対する思いを強めていったのである。しかし、東京に在住のため、いつでも行けると思っていたこともあって、昨年まで「第五福竜丸展示館」を訪ねる機会を逃してしまった。設立してからすでに八年を経過しており、誠に恥ずかしいのである。

昨年展示館を訪れ、目の当たりに第五福竜丸を見ながら展示物を見せていただき、平和に対する不勉強を深く反省させられたのである。展示のなかで、前史といわれる黒潮部隊とマーシャル群島の被爆者たちの展示は、私の今後の平和教育に大きな示唆を与えてくれ

学生と共に「第五福竜丸展示館」から学ぶ

浅羽 晴二

た。そしてまた、人間の良心に支えられた第五福竜丸保存運動の記録を読み、頭の下がる思いであった。それに反し、自治体の援助は何と貧弱なことか。国際都市として世界で注目を集めている東京都は、平和の尊さを何と考えているのであろうか。

現在は大学で教鞭をとっているが、学生の様変わりに戸惑いを感じることが多い。近頃は、講義のみでは、学生の問題意識を引き出すことは難しいのではないかと考え、出来るだけチャンスを利用して外に出かけるようにしている。

数年前になるが、大学の教職過程で、地域総合学習を計画し、長野の松代大本營跡を見学した。強いインパクトを受けた学生たちの中で、いつのまにか、「松代ショック」という言葉がはやった。松代を契機に学生たちは、ヒロシマ、沖縄の研修旅行を実施し、戦争の認識を深め、平和の尊さを主体的に受けとめるようになつていった。

その影響もあって、教育研究会のメンバーは、今年度の活動計画の中心に

平和教育を位置づけることにした。その活動の一環として、ビキニ被災シンボルである「第五福竜丸展示館」を見学することになったのである。

甲板の上で館のかたから、熱のこもつたお話を聞き、船内を見学した後で、展示物を見せていただいたので、学生は一段と強い印象を受けたようだ。

学生の感想文を読んだが、本質を見抜く鋭い感性と創造力に感動を覚えた。

ほんものにふれる時、若者は、大人を越えて大きく自己変革していくのではなかろうか。

今、学生の中からヒロシマに行こうという声が起つていている。このような活動に参加することによって学生たちは、歴史や平和に対する責任を、一步、自覺的に受けとめていくのではなかろうか。

地球時代に入ろうとしている今、核廃絶は、人類の平和を考える上で、最大の課題であろう。残念ながら、権力のおろかさは、今日なお、核抑止論を捨てようとはしない。

来年は、戦後半世紀を迎える。私たちは被爆体験の歴史を心に刻み、核戦争を拒否する決意を新たにし、核廃絶への努力を重ねることが何よりも大切ではないかと思っている。



大石又七さんの模型を前に、元乗組員と「家族」。前列右から三人目一枝さん、一人おいて久保山すずさん。(1985年9月23日、焼津・弘徳院)

●ベン・シャーンの「ラッキー・ドラゴン」、ベン・シャーンの「ラッキー・ドラゴン・シリーズ」に「船主」というペインティングの作品があり、眼鏡をかけた、見るからに貴族のある人物像である。この作品のモデルは誰なのか、本当に第五福竜丸の船主、船館に訪れた一枝さんに「体形がそうですね。父だと思いません。普段は眼鏡をかけていませんので、手術をした後かもしれません。こんなところで会うと思っていました……」
「第五」のことは、父も

展示館の話をしたら、出航の時に見送りしない母が、私も行つてみたいって、いうんです。先にいつたら、お父さんに今どうなつていて、吃水線から下は見えない、あんなに大きいものとは思わなかつた。
展示館の話をしたら、出航の時に見送りしない母が、私も行つてみたいって、いうんです。先にいつたら、お父さんに今どうなつていて、吃水線から下は見えない、あんなに大きいものとは思わなかつた。

話しているんです。(談)

すずさんが亡くなった時、これで静かになつたねて言つてあげたかった。葬儀の後、みやちゃんが「お母さんがこんなにたいへんだったとは思わなかつた……」當時は六年生で、何もわからなかつた。私は、「それで通したら、普通にしたら」といいました。すずさんは本当に質素にしていました。何にも言われないように過ごしたじゃないかな。お金なんか一銭も

使えないだろうなと思いました。本当にご苦労さん、静かにねつた。あまりにも代償が大きすぎた。それは逃れられない。梓からはがずうと、引きずらなければならぬ。おすすさんも引きずつて歩いたでしようし、吉男さんも今も引きずつてるでしよう。

二十三人みんな違う気持ちだと思つ。どこか似ても、同じ色で砂をかぶつた位だけど、何もかも変わつた。人生変わりました。あの時、あれがなつたらどうだらうなつて思つことがあります。私は、さえそう思つんだから、船の人はもつと思うだらうな。

四十周年ぶりに見て、この船に何回乗つて、どたばた回つたんだなつて、思い出しました。焼津港に繫留されて、立ち入り禁止だった頃も、よく見てたんです。汚くなつたなつて。でも水の中だから吃水線から下は見えない、あんなに大きいものとは思わなかつた。

展示館の話をしたら、出航の時に見送りしない母が、私も行つてみたいって、いうんです。先にいつたら、お父さんに今どうなつていて、吃水線から下は見えない、あんなに大きいものとは思わなかつた。

展示館の話をしたら、出航の時に見送りしない母が、私も行つてみたいって、いうんです。先にいつたら、お父さんに今どうなつていて、吃水線から下は見えない、あんなに大きいものとは思わなかつた。

展示館見学では大きな収穫を得ました。平和のこと、人間の生命の尊厳、地球規模の環境を考える格好の教育の場となりました。政治や経済、国際社会の舞台となつている東京に、世界平和や核兵器の廃絶の道を考える場所があることははたのもしいことです。ディズニー・ランド近くにあることも、コースを組む上で好都合です。

例年、修学旅行で訪れる東京に、平和と人間の尊厳を学ぶ教育の場があり、今後一層充実していくことを一中学教師として望むものであります。

(名古屋市立大森中学校教諭)

今年の修学旅行での第五福竜丸展示館見学では大きな収穫を得ました。平和のこと、人間の生命の尊厳、地球規模の環境を考える格好の教育の場となりました。政治員は種々の制約を受けつつも、規定の条件付けられた修学旅行をなんとか実りあるもの、より教育的意義付けができるものを模索しています。

修学旅行が物見遊山と揶揄されている中で、体験し学ぶ修学旅行が追求されています。現場の教職員は種々の制約を受けつつも、規定の条件付けられた修学旅行をなんとか実りあるもの、より教育的意義付けができるものを模索しています。

修学旅行が物見遊山と揶揄されている中で、体験し学ぶ修学旅行が追求されています。現場の教職員は種々の制約を受けつつも、規定の条件付けられた修学旅行をなんとか実りあるもの、より教育的意義付けができるものを模索しています。

(二面下段よりつづく)

—修学旅行後、全體のアンケートをとりましたが、ディズニーランドや東京の街などへの子どもらしい感想の中に、第五福竜丸に触れて自分の思いを綴った生徒が大勢ありました。



第五福竜丸船主・西川角市氏（右）

の漁師が一躍眼光を浴び、国会まで出かけ、どれだけたいへんだつたか、今になつてはじめてわかりました。

父は三歳の時に父親を亡くし、一代で船王になりました。自分がきっと苦労したから、人の中をたらい回しにされて、人の顔色を見て育つたから、ちょっと苦労した人がくるとすごくかわいがるのね。船方とも一緒にご飯を食べたり、自分の子供みたいにかわいがった。

自分ではわからないけど、いつに大事に育てられたんだと思います。だから、あの人から抜けられないんだと思います。自分でも何だろうって思うけど、今でも父の話だけは駄目なんです。

父が生きていたらきっとこうだろうな、ということを「第五」の船方にしてあげたい。お嫁さんもらってよかつたね、子供が生まれて本当によかつたね、というのがあるんです。（見崎）吉男さんに

も父がいなくて申し訳ないという気持ちがすごくするのね。
今でこそ、こうして話せますが、私ですら、当時はみんなに迷惑をかけた、申し訳ないという気持ちで、顔を上げて歩けませんでした。お互いい心の中でいたわっている分にはいいけど、口に出して言つた時にそれを聞いた第三者が、自分たちと同じ気持ちでとつてくれればいいんだけど、違うっていうのがあるんですよ。



「父に間違いありません」—ベン・シャーンの「船主」を見る一枝さん(右)。〈4月13日、展示館〉

父だつたらこうだらうな、ということを
「第五」の船方にあげたい

(元第十五福龍丸船主西川角市氏長女)

西川 一枝さん

筒井ク吉さん 増田鏡之助
「第五」の前から乗つてい
て、その頃父は船長をして

「展示館に入る前は、暑いし早く見て早く出てこよう」という気持ちでした。入ってみたら第五福竜丸に吸い込まれたように、その場からすぐに立ち去ることはできなくなりました。一番印象強かつたのは、水爆被災に関する写真ペネルです。一枚一枚が何かを私たちに訴えているようでした。パネルの中の人たちが急性放射能症になり、いまも苦しんでいると思うと心が痛みます。もう二度とこんなことが起こらないことを願います」（大田真由美）。

修学旅行で展示館に入館した本校中学生の一文です。

名古屋市立大森中学校の本年の修学旅行は、名古屋市内の中学校としてはごくあたりまえの東京・横浜二泊三日のコースを設定しました。東京ディズニーランド、都内散策、横浜散策で名古屋に戻るといういわば定食のコースです。ただ本校三年生教職員は事前の準備段階で「第五福竜丸」はどうしても行程に組み入れるという目的意識を持っていました。今回の修

学旅行の目玉の一つであったのです。この見学に至るまでには、三年生担当教職員の二年余にわたる学年ぐるみの取り組みがありました。二年前新入生を迎えるとき、「学年運営の方向性を論議する中で打ち出されたのが、「人命尊重・人権・平和教育」でした。生徒の自主性を重んじる本校教育の土台の上に立つものです。

いじめや仲間はずれもない、活動に創意活動に取り組む生徒集団でした。が、一年生の夏休みに交通事故で一人の生徒の死去という事件が起きました。これを契機に、人の命を見つめ直そうと、秋の文化祭では「人間の生命の重さ」をテーマにして学年全体の企画に取り組みました。人の顔写真を切り抜いて、万の人の顔を貼ってみようということになり、B版紙に貼りめぐらし、廊下全体を人の顔ばかりのトンネルにしました。三百人の学年構成員で連日奮闘しても七万人分にとどまり、目標十万人には及びませんでした。戦争とか災害で失われる人命の数も調査し、

三月、退職していく老教師が学年集会で語った話は、少年の頃の戦争体験でした。空襲で焼かれる名古屋の街路を逃げまどったことなど、生徒の心に残るものでした。一学年となり、修学旅行の目的地選定という時期になりました。「平和、人命、人権」には広島が適當であろうと考へ、内定してその準備にとりかかりました。保護者会で同意を得、生徒たちの準備学習もはじまりました。しかし、最終決定段階で頓挫してしまいました。

名古屋市内の中学校は関東方面と相場が決まっていて、新幹線も割り当て済みであること、広島へは例がないこと等々を持ち出され、ついに変更を余儀なくさせられました。現場教職員では動かすことのできない慣行や、一中学校の創意を生かしきれない現実の限界を痛感しました。

されば、次善の策として、東京方面でこれまで取り組んできた趣旨を生かせる候補地がないかと検討を重ね、合致する候補地が第五

六月二十一日の修学旅行当日は、東京一日班行動の前の全員参加のコースとしました。三百人では手狭ということで二つのグループに分け時間を前後して見学することになりました。前の芝生地に整列して、館の方の熱のこもった話に静かに聞き入っていました。とはいっても老朽の木造船だけの展示館、十五分そこそこで通り抜けてくるのではと予想していましたが、三十分経つても全員集会にはなりませんでした。時間の制約があり、追い立てるように館から引き上げさせたのでした。水爆の死の灰を浴びた歴史の証人が語る現実が、生徒の耳目を奪い、強烈な印象を与えたからでしょうか。

「ぼくはここに来る前に原爆なんて終わってしまったものと思つていました。館の人の話を聞いたり、第五福竜丸やパネルを見て、いま日本がとても危険な状況になっていることがわかりました」（松浦健一）。（四面下段へつづく）

平和と人間の尊厳を求めての修学旅行

中村茂喜

福龍丸展示館であつたわけです。
下見は当然のこととして、広島・
長崎の原子爆弾のこと、戦後の核
開発競争と原水爆実験、第五福龍
丸の被爆など、資料・ビデオ教材

「福竜丸だより」今年の一月十五日の新年にあたって▽と題する挨拶のなかで第五福竜丸平和協会会長川崎昭一郎さんは、次のように述べておられます。

「第五福竜丸展示館は水爆の恐ろしさを被害船自ら語りかけ、核兵器のない未来への願いを体現した、世界でもユニークなミュージアムであり、とりわけ若い世代における平和意識の涵養に少なからず貢献してきました。」

ところでいま世界に水爆は何発、配備されているのでしょうか。最も新しいデータとして、ピュレティン・オブ・ジ・アトミック・サイエンティスツという、アメリカから出ている国際的な雑誌がございますが、先日届いた今年の一・二・三月合併号によりますと、昨年十二月末現在アメリカには、全部で七

九〇〇発の水爆が配備されております。マスメディアで大宣伝されましたアメリカと旧ソ連とのあいだの「戦略兵器削減条約II」いわゆるSTART IIが、まだ批准されていませんが、かりに完全に実施されるようになつたとしましても、今から九年後の二〇〇三年になつても両国は水爆をそれぞれ三〇〇ないし三五〇発持つことを認めています。これらの水爆はもちろん飾り物ではなく、すぐ実際に使えるようになっています。ところが世界のマスメディアは、「もはや『冷戦』は終り、大幅な核削減」が始まり、これから世界平和の問題は「核不拡散体制」の維持である」と呼び続けています。これに影響をうけてか、前日本平和学会会長の高柳先男さんまで次のように述べています。

豊田利幸

いま何をなすべきか
——戦域ミサイル防衛(TMD)への参加を憂える——

●記録「ビキニ事件40周年記念シンポジウム」（一九九四・二・十九・学士会館）

(引用です)

— ここは大事です —

皆さん御記憶のよう、米国当局者は実験後、水爆の爆発実験のさい、予期しない方向に風が吹いたため、放射性降下物（死の灰）が現地住民のいるビキニ、ロンゲラップ等の島々に降ったのだ、と説明しました。第五福竜丸が被爆したのもその風が運んだすさまじい量の「死の灰」によるものでした。

ところが前に述べました関係書類の中には「記録用のメモ」が残っていて、それによりますと、実験前日の二月二十八日午前七時には住民のいる方向には風は吹いていない、という気象報告がなされましたが、午後になって風向きが変

そのような状況の中で実験は強行され、その後、実験の最高責任者である米原子力委員会のリュイス・シュトラウス（Lewis Strauss）委員長は、ことは放射性降下物による災害の補償問題に発展するおそれがあるからと、上記気象情報記録を全面的に秘匿するよう命じました。「予期しない原因」は権力者が責任を逃れるために用いる常套句ではあります。それでも、これは余りにも非人間的な嘘ではないでしょうか。かすかな救いとしては、今述べましたシユトラウスのやり方に、ロス・アラモス研究所の実験部門の長アルヴィン・グレイヴス

書。すでにナチス・ドイツは
降伏し、マンハッタン計画の目的はなくなつたから、米国は原爆の使用を考えるべきではなく、「日本に対し予告なしに原爆攻撃することはすすめられない（unadvisable）。もし米国がこの無差別破壊の新しい手段（原爆）を人類に対して最初に用いるならば、米国の世界中の人々の支持を失い、軍備競争を引き起し、このような兵器を管理する国際的とりきめに到達する可能性を損なうことになろう」と明言している。この報告書が提出されてから約一ヶ月後の七月十六日、史上初の原爆実験がア

き巨大な勢力がアメリカの自由と民主主義を脅かしていること、そしてアメリカの公共政策が科學者・技術者のエリート集団の虜（とりこ）になりつつあることを警告した。

九四
九五

韓寅の口で初夏の風が吹く

り、午後六時の気象報告では、核爆発実験には適さない、と記されていました。さらに真夜中の報告では、各高度における気象状況がますます実験に適さなくなってきた、と詳しく述べられていました。それは爆発実験の七時間前のこと

(Alvin Graves) が強く反対した
とのことです。残念ながらグレイン
ガスの反対意見は職権でねじみせ
られ、今日にいたりました。

ラモゴードで行われ、それから一ヵ月足らずのうちに広島・長崎に相ついで原爆が投下された。

クリントン政権は昨年十一月、情報公開までの期間を少數の例外を除き四十年とする大統領令案を意していることが全米科学者協会 Federation of American Scientists によって暴露されました。ところがこの四十年という時間はニクソン政権のときは三十年だった、カーター政権では二十年だった、クリントン政権によつてずつと後退したわけです。

また、去年アメリカ上院が、CIA（米中央情報局）の新予算総額——明細はいいけれど総額を、少なくとも今後三年間にわたつて公表するよう促す決議を米上院は採択しました。しかし、クリントン大統領は、一月になつてこれを全面的に拒否しました。これは——申しわけないんですが「朝日」「毎日」をはじめ日本の新聞だけ見落とす虞れがあるので——かなり前から、インタナショナル・ヘラルド・トリビューンをとつておられます、これが二月一日付のがニューヨーク・タイムズの社説を

載せたのです。いま申しあげたことはニューヨーク・タイムズの社説の要約でござります。で、ニューヨーク・タイムズの社説は「Secrets, Secrets, Secrets, 秘密、秘密、秘密」という見出いで、クリントン政権がそういうことをやっているという痛烈な批判でございました。

まずこのようなことを念頭に置いて、これから申しあげますアメリカの最近の政策を聞いていただきたいと思います。

どういうわけか、かなりいわゆる平和志向あるいはピース・オリエンティッドといいますかそういう学者の方々も、もう冷戦が終わって、核兵器はどんどん減らされてもしろ廃棄するのに困っていると、いうことを強調され、軍産複合体にいたっては、それを解体するために失業者がやたらと出るので、それに困っているという程度の問題意識であります。

じつは、冒頭にのべましたように、一発の水爆でビキニ事件がおきたのですが、それがいまではアメリカだけで、七〇〇〇を超す量を持って平然としているという歴然たる事実があります。それどころ

ろか、水爆をいかにして有効に使うかということが真剣に考えられる。いるということを、ぜひ皆さまにお伝えしたいと思います。（時間の制約がありますのでその要点だけをかいづまんでもうしあげることにします。）

その前に、アメリカにもまともな軍人も、まともな市民もいるという、ひとつエピソードをご紹介いたします。これは昨年の五月二十五日のアメリカのウォール・ストリート・ジャーナル紙に載った読者の投稿であります。それはどういうことかといいますと、ご存知のようにどの国も、やれ環境保護、環境保護といつておりまして、フロンガスは非常にけしからんと（フロンガスは安定していて軽くてこわれなくてすぐ上へ上へとあがっていく。最後には地球をとりまいているオゾン層を破壊してしまう、オゾン層に穴があく）だからスプレーとか洗浄剤として役立つ化学物質ですけれどもそれを使わないようにしようといふそれに関連した投書でございます。

米空軍は、一九九六年一月一日までにフロンガスを全面禁止せよ」というアメリカ環境保護局（EPA）

A) の計画に応えて、核ミサイルの冷却システムをフロンガスを使わないように取り換えることにしました、というのです。これに関連して投書した人 (Joan Rigdon) は、こういうふうにいっているんです。「米国政府は、核戦争の大惨事がおこつてもオゾン層は断乎守りぬくつもりである」(笑) 笑えないような…これは事実なんですね。

もうひとつ、これも最近、今年の二月一日付のインター・ナショナル・ヘラルド・トリビューンに載った記事であります。記事というよりも、オピニオン・ページというのですが、読者の中の意見、日本の「論壇」なんかよりはるかに紙面を割いております。そこに出ているゼーリング・S・ハリソン (Selig S. Harrison) の論文の結びにですね—アメリカの一人の軍人の最近の報告の一節が引いてあります。その軍人はアンドリュー・グッペスター将軍 (General Andrew Goodpaster)。彼のためには「ハーズ・ホー (Who's Who) 人名辞典」でじぶんな将軍か調べてみたら、立派な経歴の将軍のようです。

1994年7月15日 (2)

制」と核保有の関係に触れられる箇所は気になりますので、これからお話ししますことの関連で、民主主義の権化のように思われている米国の実状について短く述べさせていただきます。

アメリカの民主主義の姿と核開発政策

昨年八月、私は朝日新聞の論壇のもとめに応じて書きましたが——八月六日朝刊ですが——私は八九年十二月に始まつた米国のパナマ侵攻に触れ、これが責任ある国のすることとかと書きました。このパナマ侵攻について当時のマスメディアは、その真相をほとんど伝えませんでした。昨年、「N.H.K.スペシャル」でやや詳しい経過が報道されましたので、いまだご存じの方が多いと思いますが、それでも民主主義を標榜する国かとあきれるほどの残虐無道な行為でございました。

またごく最近、ベトナム戦争の立役者であった当時のアメリカの国防長官ロバート・マクナマラについての非常に分厚い著書が出ました。(これは私が早速買い求めました。)

たる本 [Promise and Power : The Life and Times of Robert McNamara, by Deborah Shapley Little, Brown and Company 1993, 734] ですが、著者はデボラ・シェイプリーという女性の方ですが、大変な衝撃を与えた本です。この本には、ベトナム戦争の開始・遂行が米政府内でどのように決定されたか実際に刻明に書かれています。これによりますと、世評とはまつたく裏腹に、マクナマラは、科学・技術はもとより国際情勢についてほとんど知識がない、いわゆる学校秀才——カリフォルニア大学のバークレー校、ハーバード大学の大学院、いずれもトイップで出ているのですが、そしてディベート（討論）には滅法強く、しかし、ボスにはへつらい部下には傲慢で苛酷だったようです。これは具体的な事実が書かれております。またこの著者が何度もインタビュー（まだマクナマラ氏は生きておられますので）したときも、平気で嘘をついたということをこの本の中ではっきりと書いております。アメリカではこういう人物のことを、うまい言い方をするんですね。Kiss my kick down

上の人にはむかってはキスをし、下の者はけつとばす——こういふ人物だと書いてあるんです。米国民にとって最も不幸だったのは、マクナマラが自分のベトナム政策、あるいは戦略を政府部内で批判し、異議をとなえた直属の部下である国防副長官ジョージ・ボールをほとんど反逆罪だとまでいって罵しり、彼を政府部内で孤立させるためのあらゆる術策を弄した。このボールはあとで回顧録を書いております。私はその現物を見ておりませんが、その本は出版されております。

このようにして米国史上最大の惨事であるベトナム戦争がほとんどのマクナマラ一人によつて始められ、五万八〇〇〇人以上のアメリカ人が死に、さらに数知れないアメリカの若者が身体的にもまた精神的にも傷つきました。もちろん、それをはるかに上回るベトナム人の生命が奪われ、ベトナムの国土をとり返しのつかないままで破壊してしまいました。このような国防長官の存在と行動を許した体制が、果たして「民主的なコントロールのきく」ものだつたでしょうか。

プリーによりますと、彼女がこの本を書くためにマクナマラにインタビューしたとき、いろいろな条件をつけて自分がしゃべったのをそのまま載せては困るといったそろですけれども、ただ、彼女は次の言葉を引き出した——マクナマラが「自分がした失敗のうちの最大のものはベトナムであった」ということを初めて認めたそうです。

この本は、昨年出版されると米国内で大きな反響をよび、ビュレティン・オブ・ジ・アトミック・サイエンティスツの昨年七・八月合併号には、ジョン・J・メアーズハイマー（John J. Mearsheimer）というシカゴ大学教授による長文の絶賛ともいいうべき書評（McNamara's War）が載っております。まだ生きている超知名人の生涯を完膚なきまでに批判した著者の勇気と努力に感動したのは私だけではありますまい。それにしても、ベトナム戦争をだれがどのように始めたか、その真相を私たちが知るのに三十年もかかったとは、暗胆たる気持ちにならざるをえません。

この年数に関連してわが国のマス・メディアでは、私の知るかぎ

を載せてくれました。——署名はないのですが、中馬さんの筆と田島さんとあります。それに刺激されて、すこし経つて十一月三日付の「毎日新聞」の社説に、少しおだやかで「T.M.D構想」は危険だ」というていどのものを掲載しました。一方、十一月二日付の「赤旗」はかなりこの問題をとり上げて、論説としてではなしに記事として図解入りで戦域ミサイル防衛の解説をしております。その後、これについての議論は、まことに結構私は見ておりません。一流の総合雑誌とよばれるようなものにもほとんど扱われていません。

わが国のマス・メディアに関する連して、アメリカ・クリントン政権の国防省の人事の報道に触れておきたいと思います。たとえば、アスピンさんが去年の十二月、嫌気がさして国防長官をやめるといったのですね。その後任にだれを指名するかというので、最初にはイマン（Bobby Ray Inman）という人物を指名したわけです。ところがニューヨーク・タイムズのコラムニスト ウィリアム・サファイア（William Safire）が、彼をコテンパンに叩いたんですね。

それでインマンさんは腹を立ててこんなふうじゃもう指名返上だといったんです。

コラムニストの文章とインマンの経歴、これもヘラルド・トリビューンに、くわしく紹介されております。私がそのなかでいちばんショックをうけましたのは、：：だいたい國防長官になるのは、いわゆる頭のいい子なんですね。頭のいい子を英語でなんというかといふと、クイズ・キッズ（Quiz Kids）といふんですね。それはどういうことかというと、テレビなんかいろいろなことを次々に質問されたときには、全部正解で、パッパッとやると一躍有名になるんです、あるいは頭のいい子だと。マクナマラもそうだったんですね。インマンさんは中学ぐらいからそれでは大変な（天才という言葉は使ってないですね）、すばらしいクイズ・キッズだった。それで軍関係の道を選び、とんとん拍子で出世するんですけどそこは省略しますが、じつは八年にCIAの副長官になつているんです（國防省のCIAと密接に結びついておりますので）。

たあと、彼の母校テキサス大学のプロフェッサーになつたわけです。私のいまいる大学もそうですが、ども、教授たるものは、講義の内容を学期が始まる前に書いて学生に配らなければならぬ。それをシラバスといっておりますが、イーマンさんがテキサス大学でどういう講義をしたかということが書いていて、これは原文の直訳です。

「政府が実際にどのようなことをするかといえば、それはメディアの取材傾向を徹底的に調べ世論操作に努めることである」と。この世論操作というのは、「あまり正確な訳ではなく、パブリック・ペーパーシヨン（public perception）一般の人の受けとり方ですね、それをいかにうまく操作するかということです。私もまあ、さもありなんと思いましたけどね。大学の講義摘要に堂々と書くんですから、また学生のほうも、政府というのはそういうことをするところだと割り切っているのかも知れません。

これにつきまして私の大学における浅井基文教授（この方は外務省のキャリアだった）が、「マスコミ市民」という雑誌の三百号記念に、これと同じことを書いて

おられるんです。自分はかつて取材される側であつたけれども、新聞記者なんてどうにでもなる、といふことをばざばざ書いてですね、これについてこの文章を読む人たちが、だまつておつたらけしからん、なんとかいいなさいと、それはどういうことかといふと、よく高官筋によると、とか、高官は語つた…とありますね。都合のいいこと書かせたいことをこつちがいえばいいんで…（取材する側には）自分で積極的に考え方をしようという力は、ほとんどないといきつておられます。アメリカではまだそうでない記者もいるから、そうさせまいとして政府たるものは記者をうまく操作しなければならない。とくにCIAですからそういうことに力を入れる必要がある。

インマンさんは、叩かれて腹立って、返上しましたので、そのあと国防副長官だった、ウイリアム・ペリー（William Perry）さんが長官の指名を承認して、一月になって、上院で満場一致で承認したわけです。日本の新聞では、ただ、ペリーさんは、温厚で立派な人だと書いてあるだけです。実はどう

まずハリソンさんの論文の題を申しますと「核軍備を放棄することがペイするようにするための刺激」で、「放棄する」の原語はわが国の憲法第九条で使われている「リナンシェイション（renunciation）」なんです。ではその刺激とは何かというと、グッドパスター将軍の提案である「アメリカとロシアは現在のそれぞれの核兵器三〇〇〇から、それをできるだけ早く一五〇〇に、ついで一〇〇〇にそしてゼロに削減しなきゃいけない。これをして始めて、核兵器を持とうなどという国に、そういう気持ちを放棄させるのに役立つだろう」というのですね。

Gregg Herken, *Cardinal Choices : Presidential Science Advising from the Bomb to SDI*, Oxford University Press, 1992)、ねむねのじゅが、科学・技術のわかる大統領というのはほとんどいませんからその取り巻きのいわゆりになる。日本との関係でここまあと、去年の九月二十一日はアメリカの国防次官のジョン・サイチエ博士が防衛庁を訪問して、朝鮮民主主義人民共和国の核疑惑、それの「労働一號」の脅威を強調して、これを迎撃する兵器体系の開発である、戦域ミサイル防衛の計画に日本が参加するように促したというんですね。

核問題をずっとやってきているコ
スター・ツィピス (Kosta Tsipis)
という教授がいますけれども、彼
から昨年秋手紙をもらいました。
その中で、アメリカの新聞を見て
彼はショックをうけて、「おまえ
の国は、どうもこれ（TMD）に
参加しそうだ」という報道がある。
とんでもないから、これをなんと
か阻止するようにおまえ自身はも
とより同僚それからマス・コミに
「もはたらきかけてくれ」といって
きました。そのときにいろいろく
わしい資料を送ってくれまして
——皮肉なことに国防次官のジョ
ン・ド・イチエというのは、MIT
の化学の教授で副学長まで勤めた
実力者なんですね。しかし彼によ
ると、アメリカの学会では折り
のタカ派で、軍部および兵器産業
と深く結びついているクリント
ン政権内でも、核実験停止モラト
リアムを一日も早く破棄するよう
主張している急先鋒の一人だとい
うことです。

で、これを契機に（すぐ後にや
めた方ですけれども）細川内閣の
最初の防衛長官をやった中西啓介
氏がワシントンに行つて、正式参
加という調印ではないんですが、

参加を前提とする作業部会を設けて、具体的に研究していくことを合意しているわけです。これが去年の九月二十七日ですね。

さらにもう一つ、十一月二日には、米韓防衛定期協議に出席のために韓国を訪れた当時の国防長官レス・アスピング氏が日本へ立ち寄って、TMDに積極的に参加することについてのダメ押しをしたわけです。はっきりとどういう目的かというと、さすがにすぐに軍事的に役立つとはいいくらいから「政治的シグナル」として重要なだと力説しているわけです。

こういうことでどんどん事態は進んでいるんですが、日本のマス・メディアおよび市民運動のなかで、この計画に日本が参加することがいかに危険で、不条理であるかという受け取り方が残念ながら非常に弱いということです。内幕を告白しますと、私はたまりかねて「朝日新聞」に出かけていて中馬論説主幹に会い何とか世論を喚起してほしいと頼みました。彼は論説ですから紙面にはあまり関与できないのですが、それではといふので朝日は十月二十九日付の社説で「戦域防衛構想に飛びつくな

道でまわっている衛星が危なくなつたら、もつと遠くの軌道へ動かすんですから、彼らにとつて最小小限防御力であるということになります。つまり核戦争を六ヶ月戦い抜くため、なんとかして通信・命令システムを防御しなきやならないピスさんなんかは、実に愚かなことで、こんなことはすべきじゃないといつてているんですけど、ミルスターを支持する勢力は非常に強いのです。

一方、アメリカの一般市民の間には、ソビエトは崩壊してしまつたじゃないか、もう核戦争のことなんか考える意味なんかないぢやないか、中止せよという意見もたしかに出てるんです。しかしクリントン政権は、ミルスターを中心という案は退けて、じつは、最初の実験がこの二月におこなわれる（二月のいつだとは書いてありますせんが）というのを、二月一日付のヘラルド・トリビューンで読み

先ほどの高柳さんの説と同じで、いくら武器があつたってそれで危険なことはない。だが、どんな人物が持つてゐるかということで危険であるかないかがきまるというのです。これは「二重基準（ダブル・スタンダード）」もいところですね。

時間の関係でひとつだけエピソードを申し上げます。ここにおられる小川岩雄さん、山田英一さん、そして亡くなられた三宅泰雄さんとも一緒に参加した一九六七年、スウェーデンのロネビーで開かれた第十七回パグウォッシュ会議のことです。そのとき、私の意見にたいして、会場では反論しなかつたのですが会議がすんだあとで、ソ連から来ていた出席者がアメリカの学者と一緒に私のところに来ました。もちろん敵対的な言い方じゃないんですが、どういう言い方かといふと、アメリカやソ連が核兵器を持つことはちつとも危険じゃないとおっしゃるんですね。その例として（ソ連の科学アカデミーのエライサンですから）私はサマー・ハウスを持っている。私の趣味は、ガン・コレクションであります。だからそのサマー・ハウス

いう意味で立派かといいますと、兵器の研究・開発にはうつつけの人なんです。ペリーさんはスタンフォード大学とベンシルベニア大学で、数学と工学を専攻して、ペニシルベニア大学では数学の論文で博士号もとっているんです。いくつかの兵器産業、ハイテク研究所の顧問をずっと務め、軍事産業との結びつきはきわめて緊密です。副長官のときは、飛行機の表面にレーダーを吸収するものを塗って、レーダーに映りにくくして、B-2爆撃機ステルス（最近アメリカ議会でも問題になったんですけども）これの旗振り役をつとめた人です。そういうなかで、TMDはじめこれから述べますミルスターという計画を、中止するところか実験実施にゴーサインを出しているんです。ミルスターといふのは、どういうものかといいますと、「戦略および戦術中継衛星（Military Strategic and Tactica Relay Satellite）」の略称 MIL STAR のこと。その内容は、「核戦争のために宇宙に基地を置く頭脳」つまり、「核戦争の勃発によってワシントンとペンタゴンが破壊され、米国内の電子回路網

がたずたになつたあとでも、最小限六ヶ月は核戦争を戦いぬいてアメリカは最後の勝利をかちとる計画の最重要部分なんですね。いきなりこういう話をお耳に入れますと、「冷戦終焉」論者にはちょっと信じられないようと思われるかもしませんが、これが現実なんですね。ミルスターは、四年前に米上院で公に議論された（じつはその前から計画は進んでいたんですが）。そして二年ほど前から規模縮小が問題になって、設計見直しもおこなわれたんですね。ところがクリントン政権は、九四年度国防予算要求の中ミルスターにパッチリ予算計上しているわけです。

なお、今年クリントン大統領が発表しました一般教書には、軍事費の削減という言葉がいっぱい出てくるんです。そのなかで注意してご覧になるとお気づきになると思いますが、一般教書にはこういふ文章があるんです。

「世界的な安全保障の責任を果たすために、来年度の国防予算は削減しない」といつて九五年度の予算の中で実際にそれをしたんですね。ここで注意しなければならないのは、

いのは「世界的な安全保障の責任を果たすため」のということの実質的な内容です。これはアメリカがいつでも二つの戦争を同時に遂行できるようにしておくことです。そのためになによりも大切なのは軍事的通信網の確保なんです。

ミルスターとは具体的にどういう兵器システムかといいますと、ものすごく精密で高級な衛星を二個打ちあげるんです。それらの衛星と地球上のいくつかの軍事施設との間で、通信・連絡ができるようにしておくのです。この発想はべつに新しいものではなくて、日本でも将来の電話は、地上の電話回線ではなくて静止衛星を通じおこなうようになるといわれています。しかし、当然のことながら核戦争をするときには、まず、相手の通信・指令システムを壊すことを考えますから、相手の衛星を打ち落そうとするでしょう。そこでミルスターではどういうことを考えているかといいますと、ある高さたとえば高度三万七〇〇〇キロあたりの衛星軌道にある六個の衛星が、潜在的攻撃者、つまり敵に襲われそうになつたら、すぐ逃避させてさらに遠くの衛星軌道に乗せ

るというのです。これは間髪を入れずにしなければならないので技術的には大変なことです。

私はこういう海外では公然化している情報を読んでいまして、日本マスコミの状況は少しどうかしてのではないかと思っていました。たとえばTMDにしましても、あれは核兵器ではないじゃないか、核爆発しない、という。北朝鮮が労働1号とやらでミサイル攻撃をするかもしれない、それには核が積まれているだろう。それを非核で迎え撃つんだから、完全な防御であるからいいではないかという考え方なんですね。

じつは、最近わが国には、憲法第九条、自衛隊、そして国連安全保障理事会の常任理事国入りなどをめぐる議論のなかで、いまや「たんなる平和理念をあげつらっているときではなく、最小限防衛力は持つべきである」という意見まで出されるにいたりました。その具体化のひとつとして、早期警戒システム——衛星・レーダ・ソナー・防空ミサイル・迎撃戦闘機云々というのですね。これは、そういう論者によれば非核の最小限防護力になるわけです。しかし

にはいろんなピストルや銃がある。もちろん皆使えるものばかりで、自分の楽しみはときどきポンポン

ですね。

とつての何よりのリクリエーションになる、と。それからなんですか、その回りにはたくさんのおやじ・

おやじがあるが、だれ一人私を不安に思う人はいない。なぜかといえ、私はみんなに信頼され、責任ある行動をとる人物だと思われますから。それをいわれたとき、こちらは「の句がつげなかつたわけですね。

しかし、日本は第九条があり、銃器の保持は法律で禁じられていますから、今紹介しましたソ連のアカデミー会員さんのようなことはあからさまにはいえなくとも、ラの中でそう思っている人は多いんじゃないかなと思います。平和学会の会長さんですらそういうことをいふんですから…。

真実を知り、伝えて
いく責任

にはやっぱり教育委員会がありますて、そういうことはまったく教え

て、その具体的な例証のひとつとして――私がいまもつづけておりますが、明治学院大学ではカリ

ニア大学のいろんなキャンパスから学生が来るんです。私は毎年四月から七月まで「科学・技術・平和」について週二回講義をしてい

ます。カリキュラムの中に必ず広島研修旅行を入れてあります。そして必読の文献として、フランク・レポート(注二)の全文とアイゼンハーウィーの告別演説(注三)の全文をコピーして渡しています。

これらの名前は知ってるんですが、アメリカも困ったことに、若い世代の学者の大部分は核問題の認識・理解について惨憺たるものであります。教育がなされてないですから。

アメリカとしては、口がさけても核兵器は絶対悪で、あれは人類にとって許せない兵器であるなんてことばっかりです。いくら自由と zwar でも、アメリカの小・中・高校に

いる、と。それからなんですか、その回りにはたくさんのおやじ・おやじがあるが、だれ一人私を不安に思う人はいない。なぜかといえ、私はみんなに信頼され、責任ある行動をとる人物だと思われますから。それをいわれたとき、こちらは「の句がつげなかつたわけですね。

しかし、日本は第九条があり、銃器の保持は法律で禁じられていますから、今紹介しましたソ連のアカデミー会員さんのようなことはあからさまにはいえなくとも、ラの中でそう思っている人は多いんじゃないかなと思います。平和学会の会長さんですらそういうことをいふんですから…。

これはもうだから軍備は撤廃しなきやいかん、ということを実際に説明的述べておられます(前出)。アメリカも困ったことに、若い世代の学者の大部分は核問題の認識・理解について惨憺たるものであります。教育がなされてないですから。

アメリカとしては、口がさけても核兵器は絶対悪で、あれは人類にとって許せない兵器であるなんてことはもちろん教えられないのです。いくら自由と zwar でも、アメリカの小・中・高校にいる、と。それからなんですか、その回りにはたくさんのおやじ・

おやじがあるが、だれ一人私を不安に思う人はいない。なぜかといえ、私はみんなに信頼され、責任ある行動をとる人物だと思われますから。それをいわれたとき、こちらは「の句がつげなかつたわけですね。

しかし、日本は第九条があり、銃器の保持は法律で禁じられていますから、今紹介しましたソ連のアカデミー会員さんのようなことはあからさまにはいえなくとも、ラの中でそう思っている人は多いんじゃないかなと思います。平和学会の会長さんですらそういうことをいふんですから…。

これはもうだから軍備は撤廃しなきやいかん、ということを実際に説明的述べておられます(前出)。アメリカも困ったことに、若い世代の学者の大部分は核問題の認識・理解について惨憺たるものであります。教育がなされてないですから。

アメリカとしては、口がさけても核兵器は絶対悪で、あれは人類にとって許せない兵器であるなんてことはもちろん教えられないのです。いくら自由と zwar でも、アメリカの小・中・高校にいる、と。それからなんですか、その回りにはたくさんのおやじ・